

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

祖父と折り鶴

埼玉県 入間市立向原中学校 二学年

新井 琉那

今年のお盆、私は祖母の家の盆棚に折り鶴をそっと供えて手を合わせた。昨日、祖母は祖父の骨を納めているお寺に迎え火に行っていたので、今日は祖父の好物だった寿司を食べながら話をしようと集まっていた。

「おじいちゃん、久しぶりに皆に会えてきつと喜んでいるね。」
祖母がそんなことを言いながら祖父との思い出を話してくれた。

祖父は国の特定疾患に指定されている難病で九年間の闘病の末に亡くなっている。元気だった祖父が救急車で運ばれたのは突然のこととで、大きな大病院に運ばれた時、最初は末期の肺ガンではないかと言われた。まだ働き盛りの五十代半ば。突然、肺を自力で動かすことができなくなり、全身の筋肉を動かすこともできず、回復するかも分からない状態に家族も不安な日々を過ごしたそうだった。そんな状況で祖父の闘病と祖母の生活を支えたのが、祖父が万が一に備えて入っていた生命保険だった。難病だったこともあり国の補助制度や会社の制度にも支えてもらったそうだが、生活の心配をすることもなく祖父の闘病を支えることができたのは生命保険に加入していたおかげだったそうだった。闘病を支えることは大変だったようで、夜もろくに眠らずに呼吸器の痰を取り除いたり、食事の介助や排泄の介助、やっと休めても苦しくて呼ばれるということも何度もあったそうだった。大変だったけれど、それでも祖父にできるだけのことをしてあげられたのは祖父が万が一のリスクを考え備えてくれていたからだ、と祖母は祖父に感謝していた。もし祖父が保険に加入するという判断をしていなかったら、祖父も祖父を支える家族も後悔しただろう。そう考えると生命保険は未来の自分と家族を守る大切な未来への投資だと実感できた。

亡くなる前、母が祖父にこうたずねたそうだった。

「今、何が欲しい？」

すると祖父は、

「健康な体が欲しい。」

と、そう答えたそうだった。今、健康で元気であれば何が欲しいかたず

第55回中学生作文コンクール

ねた時に、そんな答えは返ってこないだろう。たった今も病気で苦しんでいる人は世界中にたくさんいるだろう。その多くの人が健康な体が欲しいと願っているかもしれない。大切な人が苦しんでいたら、あげられるものなら健康な体をあげたい。だが何もできない無力さを感じる家族は多いのではないだろうか。生命保険は相互扶助の役割もあるという。お互いに助け合うというこの仕組みはよくできた制度だ。私の祖父を助けたように、今も苦しんでいる人の力になっっているに違いない。

私は何をしてあげられただろう。祖父が辛い時、小さかった私は兄と折り鶴を折ってプレゼントすることしかできなかった。

話を始めてからだいぶん長い時間がたっていた。祖父の優しい顔を思い浮かべながら、盆棚でもう一度手を合わせてから祖母の家を後にした。私にとって折り鶴はやさしい祖父の記憶だ。見えない力で祖父は今も家族を守っていると感じる。